

原 著

描画テストの基礎的研究 —— バウム指標と Y-G 尺度 ——

綱 島 啓 司

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(平成 4 年10月21日受理)

Personality Projection in the Drawing : Relationships between Indices of the Tree-Drawing Test and Scales of Y-G Personality Inventory

Keiji TSUNASHIMA

*Department of Clinical Psychology
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Oct. 21, 1992)*

Key words : tree-drawing test, Y-G personality inventory, personality projection

Abstract

In order to examine what kind of personality traits could be reflected to what kind of indices of projective drawing, the Y-G (Yatabe-Guilford) personality inventory and the Koch's Baumtest (Fruit Tree Drawing) were administered to 85 freshmen of a women's junior college. Y-G Scales for Emotional Stability (negative) (D, C, I, N) tend to be reflected in such indices as the lack of fruit or the right-left ratio (the right side/overall width of the tree) ; scales for Sociability (negative) (O, Co, Ag), in drawing a landscape or in the width of left side blank space ; Impulsiveness (G, R), in the height of the tree or in the width of lower side blank space ; Reflectiveness (R, T), in the tree standing out directly from the lower edge of the sheet ; Dominance (A, S), in forms of the top, simply opened or spread into more than two branches, the former being related to higher dominance, the latter to lower dominance. It was concluded that some indices of the tree-drawing test (Baumtest) could reflect some personality traits measured on Y-G scales.

要 約

85人の女子短期大学生に、Y-G 性格検査とバウムテストを施行し、客観的バウム指標と Y-G 尺度との対応関係を調べた。その結果、情緒不安定性 (D, C, I, N) が実や冠中果の描写のないことや左右比の大きさ (右側の割合が大) に表われる傾向があること、社会的不適応性 (O, Co, Ag) が背景の描写や左辺空間の大きさに表われる傾向があること、衝動性 (G, R) が下部空間の狭さと樹高に表われる傾向があること、非内省性 (R, T) は下縁立に表われる傾向があること、主導性 (A, S) が幹端の解放および放散に表われ、前者は主導性の低いことを、後者は主導性の高いことを表す傾向があることなどがうかがわれた。

緒 言

木を描かせてその絵をその人のひととなりの表現とみなす着想は、スイスのユッカー (Jucker, E) によるもので、彼は1928年頃からバウムテストを施行し、職業指導に利用していた。彼の考えを受け継いだコッホ (Koch, C.) は人格診断テストとしての体系化を試み、バウムの諸指標について解釈仮説を提示した。日本におけるバウムテストの研究は、それに注目した国吉政一、篠原大典、津田舜甫、小池清廉らのグループによって、1961年頃から始められた (コッホ, 1970, 訳者はしがき)¹⁾。

バウムテストは、被験者が偏見や不信を持たないため拒否が生じにくい、実施が簡便で記録がそのまま残るなどの利点をもっているため、臨床場面でよく活用されている。しかしながら、バウムテストを含む描画テストの妥当性、信頼性の確認ないし確立のための基礎的研究 (e. g., 青木, 1980a, 1980b, 1980c, 1985)^{2)~5)} は、これまでもなされてきてはいるが、現在なおなされつつある段階にあると言い得よう。本研究もそのような研究の一つとしてなされた。

本研究の目的は、客観的にとらえ得るバウム指標について、性格特性との対応関係を調べることである。

方 法

1. 対 象

岡山県某女子短期大学1年生某クラス85名。

2. 実施期間

当該クラスの心理学関連の授業の際、1989年

6月19日に Y-G 性格検査を、7月3日にバウムテストを実施した。

3. 実施方法

いずれのテストも集団法により実施した。バウムテストの場合、A 4 サイズ (210×297mm) の上質紙と鉛筆 (HB) を渡し、「実のなる木を

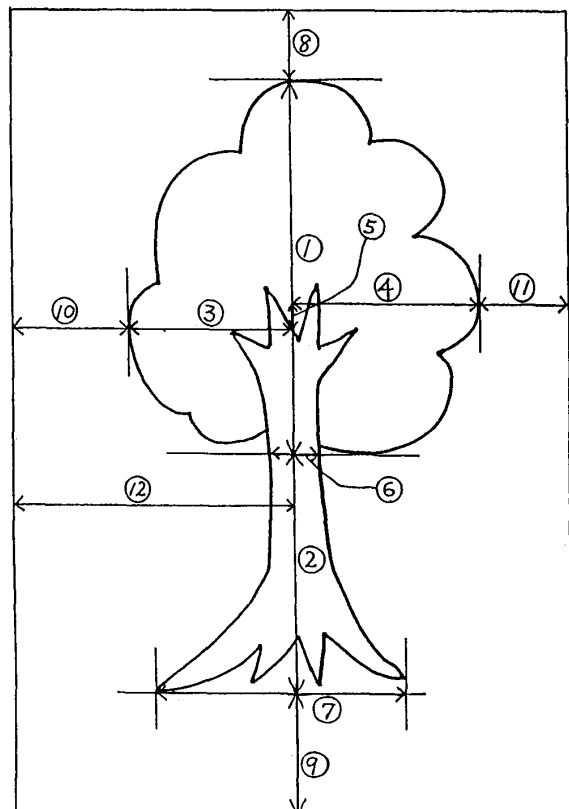


図1 バウムの計測部位

①：樹冠，②：幹，③：樹冠左側，④：樹冠右側，
⑤：樹冠左右最広部上下位置差，⑥：幹の太さ，⑦：
最下端，⑧：上部空間，⑨：下部空間，⑩：左辺空間，
⑪：右辺空間，⑫：木の位置

一本描いてください」と教示した。所要時間、用紙の使用方向、消しゴムの使用に制限は加えなかった。

4. 結果の処理方法

用紙を縦に用いて1本の木を描き、Y-G 性格検査を受けていた者(66名)を処理の対象とした。左利きの者が一人いたが、除外していない。

質的指標(バウムテスト診断指標)としては、周辺への定位、潤筆、実、冠中果、葉、落ちる葉や実、雲形・ボール・巻き手状樹冠、線描樹冠、幹下縁立、地平線、根、幹基の広がり、背景、文字の書き込み、裸木、幹の模様、幹の傷や枝の切り跡、劇画的表現、T字幹、電柱の幹、斜幹、曲線、双幹、枝、三次元枝、枝先開、一先枝、枝の重なり、下向枝、垂下枝、ひこばえ、屈曲した枝、カンヌキ枝、うねった枝、幹端の解放、幹端の直閉、幹端の上縁出、幹端の放散、幹端の鋭閉、幹端が物カゲに隠れているものの有無を調べた。

量的指標としては、バウムの用紙上の位置とバウム各部の大きさを計測した。計測部位を図1に示す。各部計測後、樹冠高比 $(①/(①+②))$ 、樹冠幅比 $((③+④)/(①+③+④))$ 、左右比 $(④/(③+④))$ を求めた。また、特殊な樹形であるヤシとブドウを描いた者(8名)を除いて、これらの比の修整値を求めた。

これらバウム指標の量的および質的チェックは、ほぼ青木(1980a)²⁾にならった。

統計処理は、質的指標に関しては、各指標についてその表現が見られた者と見られなかった者の間で、Y-G 尺度ならびに因子得点の平均値のt検定を行なった。量的指標については、各指標と各Y-G 尺度ならびに因子の間で、ピアソンの積率相関を求め、また、Y-G 尺度ならびに因子得点の高い群と低い群(各20名)の間で各指標平均値のt検定を行なった。

結 果

1. 質的バウム指標について

質的バウム指標の見られた者と見られなかった者との間でY-G 尺度および因子得点のt検定を行なった結果を表1に示す。ただし、4名以上の者に表現され、かつY-G 尺度あるいは因子

得点(因子を構成している尺度得点の合計)との間に統計的に有意ないしほぼ有意な相関の見られた指標のみを挙げている。なお、各因子を構成している複数の尺度は因子名の後の()内に示している。これにより以下のことがわかる。

1) 実：実を描いた者(n=52)は描かなかった者(n=14)に比べ、神経質(N)が低く(t=2.107, df=64, p<.05)、客観的欠如(O)が低かった(t=2.444, df=64, .01<p<.02)。因子レベルでは、情緒不安性(D, C, I, N)の因子得点が低かった(t=2.133, df=64, p<.05)

2) 冠中果：冠中果を描いた者(n=37)は描かなかった者(n=29)に比べ、抑鬱性(D)が低く(t=2.117, df=64, p<.05)、神経質(N)が低く(t=2.775, df=64, p<.01)、一般的活動性(G)が高かった(t=2.168, df=64, p<.05)。また、社会的外向性(S)が高い傾向も見られた(t=1.916, df=64, .05<p<.06)。因子レベルでは、情緒不安定性(D, C, I, N)の因子得点が低かった(t=2.466, df=64, .01<p<.02)。

3) 落ちる葉や実：落ちる葉や実を描いた者(n=5)は描かなかった者(n=61)に比べ、一般的活動性(G)が低い傾向が見られた(t=1.963, df=64, .05<p<.06)。

4) 幹下縁立：幹下縁立の形で描いた者(n=4)は描かなかった者(n=62)に比べ、のんきさ(R)が高かった(t=2.207, df=64, p<.05)。劣等感(I)が低い傾向も見られた(t=1.969, df=64, .05<p<.06)。因子レベルでは、衝動性(G, R)がほぼ有意に高く(t=1.948, df=64, .05<p<.06)、非内省性(R, T)が有意に高かった(t=2.016, df=64, p<.05)。

5) 地平線：地平線を描いた者(n=29)は描かなかった者(n=37)に比べ、思考的外向性(T)が高い傾向が見られた(t=1.943, df=64, .05<p<.06)。

6) 背景：背景を描いた者(n=4)は描かなかった者(n=62)に比べ、客観性欠如(O)および協調性欠如(Co)が高かった(それぞれt=2.269, t=2.103, いずれもdf=64, p<.05)。また、因子レベルでの社会的不適応性(O, Co, Ag)も高かった(t=2.333, df=64, p<.05)。

表1 質的バウム指標の有無により平均値に差が認められた Y-G 尺度ならびに因子

バウム指標		Y-G 尺度				Y-G 因子				
実	N	神経質 (N)		客観性欠如 (O)		情緒不安定性 (D, C, I, N)				
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
	なし 14	13.214	5.280	12.286	3.583	55.214	17.634			
あり 52	10.327	4.346	9.538	3.770	45.231	14.967				
		t = 2.107 *		t = 2.444 *		t = 2.133 *				
冠中果	N	抑鬱性 (D)		神経質 (N)		情緒不安定性 (D, C, I, N)				
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
	なし 29	14.034	5.635	12.655	4.522	52.621	16.063			
	あり 37	11.162	5.341	9.595	4.387	43.216	14.818			
			t = 2.117 *		t = 2.775 **		t = 2.466 *			
	N	一般的活動性 (G)		社会的外向性 (S)						
	Mean	SD	Mean	SD						
なし 29	9.172	4.175	10.862	5.283						
あり 37	11.108	3.080	13.027	3.898						
		t = 2.168 *		t = 1.916(*)						
落ちる 葉・実	N	一般的活動性 (G)								
		Mean	SD							
	なし 61	10.508	3.668							
あり 5	7.200	2.864								
		t = 1.963(*)								
幹下 縁立	N	劣等感 (I)		のんきさ (R)		衝動性 (G, R)		非内省性 (R, T)		
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
	なし 62	12.355	4.033	12.500	4.261	22.645	6.658	22.113	6.504	
	あり 4	8.250	4.193	17.250	1.500	29.250	4.500	28.750	2.986	
		t = 1.969(*)		t = 2.207 *		t = 1.948(*)		t = 2.016 *		
地平線	N	思考的外向性 (T)								
		Mean	SD							
	なし 37	8.865	3.721							
あり 29	10.828	4.489								
		t = 1.943(*)								
背景	N	客観性欠如 (O)		協調性欠如 (Co)		社会的不適応性 (O, Co, Ag)				
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
	なし 62	9.855	3.836	8.468	3.496	29.903	7.100			
	あり 4	14.250	1.258	12.250	3.304	38.000	5.354			
		t = 2.269 *		t = 2.103 *		t = 2.233 *				
幹の傷 枝の切断	N	劣等感 (I)								
		Mean	SD							
	なし 52	12.673	3.919							
あり 14	10.000	4.350								
		t = 2.214 *								

4 名人以上の被検者に認められ、Y-G 尺度あるいは因子得点に統計的有意差ないしほぼ有意な差の見られ特記なき場合、t 検定の自由度は df=64

(*) .05 < p < .06, * p < .05, ** p < .01

バウム指標		Y-G 尺度				Y-G 因子		
曲幹	N	回帰性傾向 (C)						
		Mean	SD					
	なし 61	11.525	4.407					
あり 5	16.200	3.701						
		t = 2.302 *						
枝	N	劣等感 (I)						
		Mean	SD					
	なし 27	13.185	3.126					
あり 39	11.359	4.591						
		t = 1.922(*), df = 64						
		分散に有意差あり						
		F'(38, 26) = 2.16 *						
一線枝	N	回帰性傾向 (C)						
		Mean	SD					
	なし 60	11.467	4.447					
あり 6	16.000	2.898						
		t = 2.436 *						
幹端解放	N	抑鬱性 (D)		一般的活動性 (G)		主導性 (A, S)		
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
		なし 46	11.565	6.170	10.826	3.726	22.652	7.897
	あり 20	14.400	3.440	8.950	3.379	16.150	8.744	
			t = 2.380 *		t = 1.932(*)		t = 2.976 **	
			df = 59.9					
			分散に有意差あり					
			F'(45, 19) = 3.22 **					
	N	思考的外向性 (T)		支配性 (A)				
			Mean	SD	Mean			SD
		なし 46	10.522	4.401	9.478			4.220
	あり 20	7.900	2.882	6.600	4.394			
		t = 2.867 **		t = 2.515 *				
		df = 53.7						
		分散に有意差あり						
		F'(45, 19) = 2.33 *						
N	社会的外向性 (S)							
		Mean	SD					
	なし 46	13.174	4.244					
あり 20	9.550	4.651						
		t = 3.097 **						
放散	N	支配性 (A)		社会的外向性 (S)		主導性 (A, S)		
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
		なし 52	8.038	4.485	11.365	4.446	19.404	8.470
あり 14	10.714	3.709	14.714	4.581	25.429	7.793		
		t = 2.048 *		t = 2.486 *		t = 2.400 *		

たバウム指標のみを挙げた。

表2 量的バウム指標と Y-G 尺度ならびに因子の相関 (有意ないしほぼ有意であったもののみ)

バウム指標	Y-G 尺度						Y-G因子			
	D	C	I	N	O	G	T	情緒不安定性 (D, C, I, N)	社会的 不適応性 (O, Co, Ag)	非内省性 (R, T)
左辺空間		.256 *				-.236(*)			.251 *	
右辺空間						-.267 *				
樹幅						.273 *				
樹冠左側						.283 *				
最下端幅					.239(*)					
左右比	.290 *	.235(*)	.318 **	.251 *				.324 **		
修整左右比	.376 **	.302 *	.411 **	.403 **			-.345 **	.444 ***		-.355 **

n = 66. 但し修整左右比については n = 58. (*)は .05 < p < .06, *は p < .05, **は p < .01, ***は p < .001を表わす.

7) 幹の傷や枝の切跡：幹の傷や枝の切跡を描いた者 (n=14) は描かなかった者 (n=52) に比べ、劣等感(I)が低かった (t=2.214, df=64, p<.05).

8) 曲幹：曲幹を描いた者 (n=5) は描かなかった者 (n=61) に比べ、回帰性傾向 (C) が高かった (t=2.302, df=64, p<.05).

9) 枝：枝を描かなかった者 (n=27) は描いた者 (n=39) に比べ、劣等感 (I) が高い傾向が見られ (t=1.922, df=64, .05<p<.06), かつそのちらばりが有意に小さかった (F'(38, 27) = 2.16, p<.05).

10) 一線枝 (一本線で描かれた枝, 小枝は除外)：一線枝で描いた者 (n=6) は描かなかった者 (n=60) に比べ、回帰性傾向 (C) が高かった (t=2.436, df=64, .01<p<.02).

11) 幹端解放 (幹端が開いたままのもの, 線描樹冠内のものを含む)：幹端解放の形で描いた者 (n=20) はそうでない者 (n=46) に比べ、抑鬱性(D)が高く (t=2.380, df=59.9, p<.05), 思考的外向性 (T) (t=2.867, df=53.7, p<.01), 支配性(A) (t=2.515, df=64, .01<p<.02), 社会的
外向性(S) (t=3.097, df=64, p<.01) がそれぞれ低かった。また、一般的活動性 (G) (t=1.932, df=64, .05<p<.06) も低い傾向が見られた。なお、DおよびTのちらばりが小さかった (F'(45, 19) = 3.22, p<.01 および F'(45, 19) = 2.33, p<.05)。因子レベルでも主導性 (A, S) が低かった (t=2.976, df=64, p<.01).

12) 幹端放散 (幹端から一度に2本以上の枝

が出ているもの)：幹端を放散の形で描いた者 (n=14) はそうではない者に比べ、支配性(A) (t=2.048, df=64, p<.05) および社会的
外向性 (S) (t=2.486, df=64, .01<p<.02) が高かった。因子レベルでも主導性 (A, S) が高かった (t=2.400, df=64, .01<p<.02).

2. 量的バウム指標について

量的バウム指標と Y-G 尺度および因子得点との間でのピアソンの積率相関係数を表2に示す。これにより以下のことがわかる。

1) 左辺空間：左辺空間と回帰性傾向 (C) との間に、低い
が有意な正の相関が見られ (r = .256, p<.05), 一般的活動性 (G) との間にも、ほぼ有意な低い負の相関が見られた (r = -.236, .05<p<.06)。すなわち、左辺空間が大きいほど気分が
変わりやすく、一般的活動性がやや低い傾向がある。また、左辺空間と社会的
不適応性 (O, Co, Ag) との間に、低い
が有意な正の相関 (r = .251, p<.05)が見られた。すなわち、左辺空間が大きいほど社会的
不適応が高い傾向が見られる。

2) 右辺空間：右辺空間と一般的活動性 (G) との間に、低い
が有意な負の相関が見られた (r = -.267, p<.05)。右辺空間が大きいほど一般的活動性が低い傾向がある。

3) 樹幅：樹幅と一般的活動性 (G) との間に、低い
が有意な正の相関が見られた (r = .273, p<.05)。木の横幅が広いほど一般的活動性が高い傾向がある。

4) 樹冠左側：樹冠左側と一般的活動性 (G) との間に、低い
が有意な正の相関が見られた

表3 Y-G 尺度および因子得点高低群間での量的バウム指標平均値の t 検定結果
(各群 n = 20, 特記なき場合 df = 38.)

Y-G 尺度・因子	バウム指標			
<p><尺度></p> <p>抑鬱性 (D)</p> <p>M SD</p> <p>高群 18.300 0.733</p> <p>低群 5.350 3.249</p> <p>t = 17.389 ****, df = 20.9</p> <p>分散に有意差あり</p> <p>F'(19, 19) = 19.66 ****</p>	<p>左右比</p> <p>M SD</p> <p>0.523 0.033</p> <p>0.493 0.023</p> <p>t = 3.331 **</p>			
<p>回帰性傾向 (C)</p> <p>M SD</p> <p>高群 17.300 1.809</p> <p>低群 6.650 2.007</p> <p>t = 17.625 ****</p>	<p>左右比</p> <p>M SD</p> <p>0.513 0.036</p> <p>0.491 0.024</p> <p>t = 2.334 *</p>			
<p>劣等感 (I)</p> <p>M SD</p> <p>高群 16.800 1.704</p> <p>低群 7.350 2.540</p> <p>t = 13.817 ****</p>	<p>左右比</p> <p>M SD</p> <p>0.523 0.032</p> <p>0.492 0.024</p> <p>t = 3.443 **</p>		<p>樹冠左右最広部上下位置差</p> <p>M SD</p> <p>7.575 9.731</p> <p>15.375 11.593</p> <p>t = 2.305 *</p>	
<p>愛想の悪さ (Ag)</p> <p>M SD</p> <p>高群 15.900 1.917</p> <p>低群 7.200 2.142</p> <p>t = 13.535 ****</p>	<p>幹長</p> <p>M SD</p> <p>89.850 28.057</p> <p>68.500 26.270</p> <p>t = 2.484 *</p>		<p>樹冠高比</p> <p>M SD</p> <p>0.585 0.126</p> <p>0.674 0.069</p> <p>t = 2.751 **, df = 29.5</p> <p>分散に有意差あり</p> <p>F'(19, 19) = 3.31 *</p>	
<p>一般的活動性 (G)</p> <p>M SD</p> <p>高群 14.400 1.789</p> <p>低群 5.900 1.917</p> <p>t = 14.499 ****</p>	<p>下部空間</p> <p>M SD</p> <p>36.825 25.641</p> <p>59.425 43.400</p> <p>t = 2.005(*), df = 30.8</p> <p>分散に有意差あり</p> <p>F'(19, 19) = 2.86 *</p>		<p>樹高</p> <p>M SD</p> <p>225.600 39.018</p> <p>194.350 60.419</p> <p>t = 1.943(*)</p>	
<p><因子></p> <p>情緒不安定性 (D, C, I, N)</p> <p>M SD</p> <p>高群 64.150 5.174</p> <p>低群 27.350 8.857</p> <p>t = 16.044 ****, df = 30.6</p> <p>分散に有意差あり</p> <p>F'(19, 19) = 2.93 *</p>	<p>左返空間</p> <p>M SD</p> <p>31.125 19.485</p> <p>18.625 13.607</p> <p>t = 2.352 *</p>		<p>樹冠左側</p> <p>M SD</p> <p>62.145 21.664</p> <p>77.580 20.550</p> <p>t = 2.312 *</p>	
<p>衝動性 (G, R)</p> <p>M SD</p> <p>高群 30.600 3.119</p> <p>低群 15.150 3.602</p> <p>t = 14.501 ****</p>	<p>下部空間</p> <p>M SD</p> <p>36.325 27.182</p> <p>62.725 43.936</p> <p>t = 2.285 *, df = 31.7</p> <p>分散に有意差あり</p> <p>F'(19, 19) = 2.61 *</p>		<p>樹高</p> <p>M SD</p> <p>227.000 39.077</p> <p>193.875 61.239</p> <p>t = 2.039 *</p>	
	<p>左右比</p> <p>M SD</p> <p>0.528 0.032</p> <p>0.492 0.023</p> <p>t = 4.087 ***</p>			

特記なき場合、t 検定の自由度は df = 38

(*) .05 < p < .06, * p < .05, ** p < .01, *** p < .001, **** p < .0001

($r = .283, p < .05$). 樹冠の左側の幅が広いほど一般的活動性が高い傾向がある。

5) 最下端の幅: 最下端の幅と客観性欠如(O)との間に、ほぼ有意な低い正の相関が見られた($r = .239, .05 < p < .06$). 最下端の幅が広いほどやや主観性が高い傾向がある。

6) 左右比: 左右比と抑鬱性(D)($r = .290, .01 < p < .05$)・劣等感(I)($r = .318, p < .01$)・神経質(N)($r = .251, p < .05$)との間に、低い有意な正の相関が見られ、回帰性傾向(C)($r = .235, .05 < p < .06$)との間にもほぼ有意な低い正の相関が見られた。すなわち、左右比が大きい(木の右側の幅が左側のそれよりも広い)ほど、抑鬱性・劣等感が強く、神経質で、やや気分が変わりやすい傾向がある。因子レベルでは、左右比と情緒不安定性の因子得点(D, C, I, N)との間に低い有意な正の相関が認められた($r = .324, p < .01$)。すなわち、左右比が大きいほど情緒不安定性が高い傾向がある。

7) 特殊な樹型であるヤシ、ブドウを除いての修整左右比と抑鬱性(D)($r = .376, p < .01$)、回帰性傾向(C)($r = .302, p < .05$)、劣等感(I)($r = .411, p < .01$)、神経質(N)($r = .403, p < .01$)、および思考的外向性(T)($r = -.345, p < .01$)との間に、低い有意な相関が見られ、情緒不安定性($r = .444, p < .001$)および非内省性($r = -.355, p < .01$)の因子得点との間にも有意な低い正の相関が見られた。ヤシとブドウを含めての左右比の場合よりも相関係数の大きさとその有意度が增大している。

次に、各 Y-G 尺度および因子得点の高い者と低い者(各20名)の間で有意差が見られた指標の平均値ならびに t 検定の結果を表3に示す。これによって以下のことがわかる。

1) 抑鬱性(D)の高い群は低い群に比べ、左右比が有意に大きかった($t = 3.331, df = 38, p < .01$)。

2) 回帰性傾向(C)の高い群は低い群に比べ、左右比が有意に大きかった($t = 2.334, df = 38, p < .05$)。

3) 劣等感(I)の高い群は低い群に比べ、樹冠左右最広部上下位置差が有意に小さく($t =$

$2.305, df = 38, p < .05$)、左右比が有意に大きかった($t = 3.443, df = 38, p < .01$)。

4) 攻撃性(Ag)の高い群は低い群に比べ、幹が有意に長く($t = 2.484, df = 38, .01 < p < .02$)、樹冠高比も有意に小さかった($t = 2.751, df = 29.5, p < .01$)。なお、樹冠高比については、攻撃性の高い群の方が低い群よりもちらばりが大きかった($F(19, 19) = 3.31, .01 < p < .02$)。

5) 一般的活動性(G)の高い群は低い群に比べ、下部空間が小さく($t = 2.005, df = 30.8, .05 < p < .06$)、樹高も高かった($t = 1.943, df = 38, .05 < p < .06$)が、いずれも統計的有意水準には達していなかった。なお、下部空間については両群間で分布に差があり、一般的活動性の高い群の方が低い群よりもちらばりが小さかった($F(19, 19) = 3.31, p < .05$)。一般的活動性の高い者は大きい木を描く傾向があると思われる。

これら以外の Y-G 尺度については、尺度得点の高い群と低い群との間で統計的に有意ないしほぼ有意な差のある量的バウム指標は見られなかった。

ここで群間差の見られた指標のうち、樹冠左右最広部上下位置差、幹の長さ、樹冠高比、下部空間、樹高は、Y-G 尺度との間に有意ないしほぼ有意な相関が認められていなかった指標である。

Y-G 因子得点については、

6) 情緒不安定性(D, C, I, N)の因子得点の高い群は低い群に比べ、左辺空間が大きく($t = 2.352, df = 38, p < .05$)、樹冠左側が狭く($t = 2.312, df = 38, p < .05$)、左右比が大きかった($t = 4.087, df = 38, p < .001$)。

7) 衝動性(G, R)の因子得点の高い群は低い群に比べ、下部空間($t = 2.285, df = 31.7, p < .05$)およびそのちらばり($F(19, 19) = 2.61, p < .05$)が小さく、樹高が大きかった($t = 2.039, df = 38, p < .05$)。

考 察

得られた結果から、Y-G 性格検査における性格特性がバウム指標に反映されることがある程

度確認できたと言えよう。ここでは Y-G 因子レベルでの総括的な検討を行なうことにする。

情緒の安定性・不安定性 (D, C, I, N) については、不安定な人は安定的な人より実、冠中果を描かないことが多く、左辺空間が広く、樹冠左側が狭く、左右比が大きい、すなわち冠部の左側が小さいという傾向が見られ、冠部の右側には差が認められなかった。冠部左側の大小、特に左右比に情緒の安定・不安定が表われやすいことが示唆される。コッホは、精神的動揺、もしくはよく見られる不安定性は、冠部が左に寄ったり右に寄ったりすることで表現されるとし (コッホ, 1970, p. 12)¹⁾、右の強調 (冠部左側は小さかったり、貧弱である) の意味することの中に、散漫、自己喪失、集中力の欠如、不確実、自己不信、易刺激性、自我の弱さ、不安、おちつきの無さ等を挙げ、左の強調の意味することの中にはそのようなことを挙げていない (同書, pp. 90-91)。また、青木 (1985, p. 19)⁵⁾ は左右の比は左: 右 = 10: 11 程度で発達的变化をほとんど受けずほぼ一定である (山下, 1982)⁶⁾ ことから、左右比がきわめて重要な解釈指標となりうると考えている。本研究の結果はこれからの仮説を支持するものと言える。

社会的適応・不適応性 (O, Co, Ag) については、攻撃性は高くないにせよ主観的・空想的で不平・不満・不信を抱き易いという意味での不適応性が背景の描写、左辺空間の大きさに反映するという傾向が見られた。コッホ (1970)¹⁾、高橋・高橋 (1986)⁷⁾ などの解釈では、風景の中の木は現実感の欠如、空想力、豊かな感情、直観的思考などを表すと考えられている。この因子についてもコッホらの解釈に一致すると言えよう。

活動性 (Ag, G) については、これを反映するバウム指標は認められなかった。愛想の悪さ (Ag) と一般的活動性 (G) とのそれぞれを反映するバウム指標は見られるが、活動性としてまとめると、有意な指標は認められない。

衝動性 (G, R) については、衝動性の高い人は低い人よりも、用紙のより下部から、より高い木を描いていた。また、用紙の下縁から幹を描く人は衝動性が高い傾向が見られた。衝動性

の高群と低群の間で樹幅には差が見られないことから、両群の差は縦方向の長さに表われやすいと考えられる。

非内省性 (R, I) については、用紙の下縁から幹を描く人には非内省的な傾向が見られ、また、ヤシ、ブドウを除いた場合、非内省性が高いほど左右比が小さい (左側が相対的に広い) という傾向が見られた。幹の下縁立は、安定操作の様式からみると発達的に最初に来るもので (青木, 1985)⁵⁾、そういう意味では非内省性との結びつきが見られても不思議ではない。しかしながら、左右比については、コッホは左の強調を平静、思慮深さ、注意 (慎重) を表わすものと考えており、本研究の結果は彼の仮説とは逆方向のものとなっている。左右の強調の解釈も決して単純にはいかないことがうかがわれよう。

主導性 (A, S) については、幹端解放の表現をする人はそうでない人よりも主導性が低く、放散の表現をする人はそうでない人よりも主導性が高いという傾向が見られた。幹端の処理に主導性が反映され、しかも解放と放散とで意味するところが逆方向であるのは興味深いことである。幹端解放の表現をする人は抑鬱性 (D) が高く、一般的活動性 (G) および思考的外向性 (T) が低いという傾向も見られた。同じ幹端部の指標であっても、その意味するところはかなり違っていることがうかがわれる。解放については、コッホは、「端のあいた幹は、不安定で抑圧された人、特にせっかちな人によってかかれる」云々としている (コッホ, 1970, p. 31)¹⁾。また、放散については、幹端がてのひらを広げたような形をしたものが大多数であった。このような形の幹端について高橋・高橋 (1986, p. 100)⁷⁾ は、「手のような構造の枝」は、外向性、強い達成欲求を示す以外に、精神的エネルギーを分散させて活用しようとしたり、外思からの影響を受け入れるようとし、環境の多方面に興味を抱くことを示すとしている。コッホの言うように特にせっかちな人が解放の表現をするか否かはわからないが、本研究の結果はこれらの解釈を支持する方向のものであった。

文 献

- 1) コッホ C (著), 林 勝造, 国吉政一, 一谷 彊 (訳) (1970) バウムテスト — 樹木画似よる人格診断法 —. 日本文化科学社, 東京.
- 2) 青木健次 (1980a) 投影描画法の基礎的研究 (第1報) — 再検査信頼性 —. 心理学研究, **51** (1), 9—17.
- 3) 青木健次 (1980b) 態度統制実験による描画指標の検討. 日本心理学会第44回大会発表論文集, 534.
- 4) 青木健次 (1980c) バウムテストの臨床的活用 — 新実施方法による新たな知見を加えて —. 京都大学学生懇話室紀要, **10**, 59—81.
- 5) 青木健次 (1985) バウム表現の発達とその表現心理学的考察 — 投影描画法の構造特性をふまえて —. 京都大学学生懇話室紀要, **14**, 1—27.
- 6) 山下真理子 (1982) バウムテストの発達の研究 — 樹冠と幹の発達の傾向および空間関係の描写について —. 教育心理学研究, **30** (4), 23—28.
- 7) 高橋雅春, 高橋依子 (1986) 樹木画テスト. 文京書院, 東京.